

角館

秋田県角館に来ている。

今朝起きたときには「角館」と決めていたわけではなく、そればかりか別に何処にも出かけなくてもいいやという曖昧な気持ちだった。でも、いつもよりも一時間遅れの朝飯をゆっくり食べながら、折角の連休だし、午後からカミさんは義母の看病に信州へ里帰りするというし、このまあいっもの休日のように雑用を処理するだけで過ごしたら、一泊旅行だって悠々出来る折角の連休をないがしろにしてしまって、さぞ後悔するだろうという気がして来た。

角館と決めたのは鎌倉駅まで歩きながらだった。

角館と鷹巣を結ぶ「秋田内陸縦貫鉄道」が全線開業十周年を記念して十月十日だけは九十五キロの全区間を十円で乗れる・・・ということは、実は九月末の新聞で読んで気にはなっていた。が、出かける決意にまでは到ってなかったのが、家を出て歩いているうちに固まってきた。縦貫鉄道はどうせ満員だろうけれど角館散策だけでも悪くないし、なによりも秋田新幹線「こまち」にも初めて乗れることだし・・・。

ピカピカの綺麗な「こまち」で十一時五分東京駅を発つ。宇都宮あたりで北方に雄大な積乱雲が聳え発っているのが遠望され、その巨人の脚もとの、山とも空とも判然しない暗闇に向かつて赤紫色の新幹線は突っ走った。どうやら季節外れの大夕立の後を追いかけているらしく、いたるところ樹木は重そうに雫を垂らして立ち、沿線の家々も道路もあらゆるものが濡れているのに「こまち」の窓だけは角館に着くまで透明であった。盛岡では山側に巨大な駅ビルの竣工式があつたらしく、張り巡らされた紅白の幔幕がぐっしょり濡れて垂れ、舗道に出来た池に映っている。

角館着十五時半。降りる仕度をしながら縦貫鉄道の短いプラットフォームを見れば、ぎっしりとヒトが立っている。盆に豆を盛ったよつな具合である。絶望。改札口で「縦貫線に、今日乗れるでしょうか」と聞いてみたら「さあ、あつちで聞いてみてください。別会社ですから・・・」とJR社員は苦笑した。

別会社の小さな駅舎を一応、覗いて見る。一杯のヒトヒトで窓口も改札も騒然としている。十円の記念切符は売り切れだから降りる駅で清算してくれと中で手を振っている。開業以来空前の乗客数なのだろうからこの混雑は無理もない。乗れたとしても、満員のジーゼルでこの山の中を二時間半も揺られればきつとこの愛すべき縦貫鉄道が嫌いになるに違いない。それは困る。静かな時に出直したほうがいい。

また隣の立派なJRの駅にとつて返して十八時五分の上りの切符を買う。以前に一度觀光バスで来て少しは知っている町だから二時間あればひとまわり出来る、泊まらないで帰ろうと思った。

兩上がりの駅前には打ち水をしたようにしっとりとして気持ちが良い。高い建物が無くて空が広い。その空は既に日暮れを感じである。先程から「駅前蔵」という觀光センターの蔵造りの壁を背にして、紺緋の着物に赤い襷がけの女性たち三十人ばかり、浅黄の法被に振り鉢巻の男衆のお囃子に合わせて踊っている。一番前列の四、五歳の幼女たちの小さな口紅がとても可愛い。お囃子がのんびりと宙に広がって消えて、他に余計な音が何も無いから、賑やかなのに、実に静かである。

角館は肅々として内陸縦貫鉄道十週年を祝っているわけだ。

六時までといって自転車を借りようとしたら、五時には暗くなりますけれどもこちらは電気が点きませんのでお向かいの店で借りてくださいと商売仇を紹介してくれた。発電機が付いた自転車を漕ぐのは五十年振りだと思う。

見覚えのある武家屋敷群を通り抜けて川の辺に出た。傍らの案内板によればこれが桧木内川で向うに見える赤い橋が古城橋とある。暮れなずむ桜の並木を見遙かしながら川堤に立つ。どの樹も幹が根元まで濡れて水を含んでいる。初め、流れの向きが思っていたのと逆なので、川が日本海から奥羽山脈に向かって流れているような錯覚があったのに、すぐに慣れて、これでいいのだと落ち着いていたのが丁度五時頃であった。

(五時通信 第二七八号 一九九八年十月十日)